

樺崎寺伝来の大日如来像と運慶

山 本 勉 (清泉女子大学)

報告者は、これまでに 2 軀の大日如来像を運慶作品として評価する論文を発表している(「足利・光得寺大日如来像と運慶」『東京国立博物館紀要』23) 1988 年 3 月、「新出の大日如来像と運慶」『MUSEUM』589) 2004 年 4 月)。1 軀は栃木県足利市・光得寺に現存する厨子入りの像で、もう 1 軀は 2003 年から 2007 年にかけて東京国立博物館に出品され、2008 年 3 月にニューヨークにおいてオークションにかけられたことで世上を賑わせた。

光得寺像は足利市樺崎町の樺崎八幡宮に伝えられ、明治初年に光得寺に移された。樺崎八幡宮は鑿阿寺奥院として経営された樺崎寺の中にあつた赤御堂の後身である。鑿阿寺の縁起の最古本『鑿阿寺樺崎縁起并仏事次第』(『鑿阿寺文書』)の中には、鑿阿寺開基足利義兼が、その開山理真上人と子息の誕生に際して出会ったのちに出家して造立した「金剛界大日并三十七尊形像」のことがみえるが、これらを入れた厨子は近世の『鑿阿寺別縁起』では樺崎の赤御堂にあつた。光得寺像はまさにこれに当たるとみられ、足利義兼が出家した建久 6 年以後、正治元年(1199)に没するまでの間の造像と推定される。

オークションにかけられた像は、伝来不詳であるが、作風や構造技法の上から、また X 線写真によって知られる像内納入品の内容から、現光得寺像との密接な関係があるものと考えざるをえず、やはり『鑿阿寺樺崎縁起并仏事次第』中にみえる樺崎寺下御堂の「三尺皆金色金剛界大日如来像」に当たると考えられる。この像を納める厨子には建久 4 年(1193)11 月 6 日の願文があつたという。

報告者は、2 像の作風や像内納入品は、それぞれ当該時期の運慶作品の顕著な特色を示し、作者として考えられるのは運慶以外にないことを論じた。この考えは現在も基本的に変化していないが、今回のシンポジウムを機に、2 像からうかがわれる建久年間の運慶の作風の展開に論及したい。報告者の想定が正しければ、2 像の製作の間には、慶派工房の声望を高めた東大寺大仏殿諸像の造像があつただけに、それを論ずる意味は小さくないはずである。